

地域農業研究の方向—「清良記」に寄せて—

生物系特定産業技術研究推進機構理事 西尾敏彦

1. 「清 良 記」

しばらく時間に余裕があって、いろいろな本を読むことができた。その一冊に「清良記」がある。ご存じの方も多いと思うが、日本最古の農書として有名な古文書である。もっとも農書の部分は全30巻のうち第7巻の1巻（この部分を「親民鑑月集」という）だけで、あとはすべて戦記である。まだ現代語の全訳は出ていないようであるが、それでもわれわれが何とか読める活字本ができたのは、当時、愛媛県の農業改良普及所にいた松浦郁郎さんのなみなみならぬ努力のたまものである。

物語は、戦国時代に現在の愛媛県南伊予地方の三間大森城に拠った領主土居清良が、豊後の大友、土佐の一条、長曾我部など周囲の強敵の侵略に耐え、よく父祖の地を守り抜いたという一代記である。冒頭には清良の祖父の代に土居一族が大友宗麟の強襲を受け、城を枕に一族郎党全員が討ち死にするなどという壮烈な場面も出てくる。一族の最期の望みを托されて城を落ち延びた少年清良が、たいへんな苦労を重ねながら、それを乗り越えて成人し、南伊予に帰り先祖以来の城を奪い返す。念願の土居家再興を果たした清良は、ひんびんと起こる飢饉を領民とともに耐えしのぎ、度重なる外敵の襲撃も勇猛果敢に跳ね退けて断固父祖の地を守り抜いていく。しかしその清良でも、最後は、世の大きな流れには抗する

べくもなく、秀吉の四国平定が進み幕藩体制が整備されていくと、城を出て隠棲し、やがて波乱に富んだ生涯を終える。NHKが現在放映中の「太平記」の影響を受けているといわれるだけに、たいへん面白い。ご一読をおすすめする。

ところで、この「戦記物」になぜ農書が挿入されているかといえば、以下の経緯による。戦争に明け暮れしている合間のある日、清良が家臣にたずねた。敵は我が国の稲麦の収穫期をみはからって攻めてくる。おかげで「作毛を被損、大小上下困窮して路頭に死人多し」。ついては「作を早くして早く取るには如何に」と。ある家臣が進み出て答えた。ごもっともなご意見ですが、「作を早くしては所により実入り不宜候（よろしからず）」。清良が再びたずねる。早く作って少しぐらい減収しても敵に取られるよりはましではないか。「15日早くして、15日は熟せざるをも（未熟であっても）刈り取るべし」と。そこで、領内の「物に博く当たりて作意ある百姓」松浦宗案ら3人が呼び出され、清良と農業談議をするというのがあらすじである。「清良記」の作者と目される土居水也は土地の神主であったというが、当時の読者には地主層も多かったであろう。ちょうど、近ごろの週刊誌にバイテク記事がのっているようなものであろうか。農業記事がこれほど挿入されるなど、もちろんこの種の「物語本」に例を見ないが、いかにも都から遠

く離れた南伊予の農村で生れた本らしく、「地方の独自性」が感じられて楽しい。

2. 「清良記」の植物

「清良記」の農業論は経営から技術まで幅広い。とくに興味をひくのは、書中に出てくる植物名、作物名の豊富さである。今日の植物種にして300近くが確認できるというが、品種（といえないものも含まれているが）にしても稲について早生12、中生24、晩生24、もち16、陸稲12、インディカ稲8、あわせて96品種、麦類では大麦が12品種、小麦が12品種、そのほかに大豆、小豆、キビなどについてもそれぞれ多くの品種名が記載されている。

さらに、暦月別に「植えるべき作物」「種子を取る作物」「取りて食する野菜」がそれぞれ列記されている。1月から12月までに取り上げられた植物・作物を数えてみると、「植えるべき作物」が延べ270種、「種子を取る作物」が延べ300種、「取りて食する野菜」が延べ250種とたいへんな数である。「取りて食する野菜」にはセリ、ナズナ、ツクシなどはよいとしても、エノキの葉、フジの葉、ツユクサ、イタドリ、スイバ、ギシギシの葉、アカザの葉、アザミなどの山野草までが続々と出てくる。戦後の食糧難時代にはいろいろな草を食べたこともあるが、これほど多くの山野草が食べられていたとは知らなかった。

もちろん、食用作物だけではない。桑、コウゾ・ハゼ・ウルシなどの工芸作物、竹・松・杉などの建材用の植物、さらには「糞草」と称してワラビ、クズの葉、小ハギ、青カヤなど肥料向けの草まで残らずとりあげられている。果たして、このすべてが当時の南伊予で利用されていたかどうかは分からないが、とにかくおびた

だしい数である。当時の農民の貧しさといってしまうまでもだが、同時に我が国の山野がいかに植物資源に恵まれており、それをまた農民が如何に上手に利用していたかをかいま見ることができたような気もする。

3. 「全国版地域農業研究」の時代

ところで「清良記」に出てくる「作物・野菜」に比べて、最近の我が国の農業では作目の少なさがなんとなく気になる。たしかにわれわれの食卓を飾る食物は、昔と比較にならないほど豊富であるが、国内で生産される農作物の数、家畜の種類となるといちじるしく少なくなっている。例えば小麦を除いた大麦・裸麦などの麦類、工芸作物、雑穀について、昭和35年と現在の作付面積を比べてみると、127万haが12万ha、43万haが26万ha、14万haが2万haとそれぞれ激減している。家畜でも、めん羊は昭和35年の8万頭近くが現在では3万頭を割る始末である。いわゆるマイナークロップ、群小家畜の切捨てである。

このような状況になったのは、昭和30年代後半以降、選択的拡大を推進してきた基本法農政によるもので、この時期から全国的に田畑には稲・小麦・大豆、果樹作では林檎・蜜柑、畜産では牛・豚など主要作目ばかりが選択的に栽培・飼育されてきた。品種をみても、稲では上位10品種のシェアが60パーセントを上回るし、小麦にいたっては上位4品種で70パーセントにもなる。米は「コシヒカリ」、「ササニシキ」、小麦は「農林61号」、「チホクコムギ」が日本中で栽培される。どこかの果物屋さんをのぞいても、林檎は「ふじ」、イチゴは「女峰」か「とよのか」ばかりが店頭を飾っている。

たしかに、農業の近代化をめざし、農業所得

の向上、農産物のコストダウンをねらったその当時の状況では、作目・品種をしぼって大量生産することが、規模拡大とともに、生産の合理化、機械利用効率の向上、さらにはまた流通・加工システムの確保などに欠かせない要件であった。いわば「全国版地域農業研究」の推進である。おかげで、米・麦などの主要穀類はもちろん、果樹、野菜、畜産についても、それぞれ選択的拡大をめざした主要作目については軒並みに生産性の飛躍的向上を達成することができた。国内で生産される農産物の作目・品種が限定されるのは、ある程度やむをえないことであった。

ただし、その結果として、豊かな地方の生物資源、在来の地方農法が軽視され、また主要農作物・家畜以外の品種改良、栽培飼養技術に関する研究が“後回し”にされたことも否定できない。山村などには低コスト・大量生産技術に適さない地域の農業に対する技術的取り組みとなると、やはり立ち遅れを認めざるをえない。しかも、折角拡大を図ってきたミカンなど主要農作物についても生産過剰が問題にされ、作付制限が求められて久しく、改めて「何を作ればよいのか」と問われている。苦悩する農村が増えれば増えるほど、技術的な対応を求める声も大きくなってきている。もちろん、技術問題をはるかにしのぐ巨大な問題が多数あることは承知の上で、やはりここまで来れば研究陣としても、「全国版」とは別の“後回しにされてきた”もう一つの地域農業研究に全力を上げて取り組むことが緊要であろう。

4. 「あとは野となれ山となれ」

そこで“後回しにされてきた”地域農業研究へのアクセスについて考えてみる。最近、バイオテクノロジーの進歩とともに、遺伝資源の重要性が再

認識され、在来品種を含めた遺伝資源の収集・保存が熱心に進められつつある。ただ、そんなこととは関係なく我が国が「資源大国」であるということを知っている人は意外に少ないように思う。今春、農文協から出版された「豊かな日本の生物環境資源」によると、この国の国土に生育する植物種は1,100属、3,850種に達し、同緯度にある北アメリカが658属、2,835種、ニュージーランドが400属、871種であるのに比較していちじるしく豊富である。しかも、この植物を育てる気候についていえば、気温、降水量、日射量を総合してみた植物生産力、つまり「純一次生産力」は10～20t 乾物/ha・年であり、熱帯多雨林地帯には及ばなくても地球上の陸地の全平均7.7t 乾物/ha・年であるのに比べてはるかに高い。

日本には古くから、「あとは野となれ山となれ」という言葉がある。あれには巷間伝えられる「あとはどうだろうと知ったことではない」という意味ではなくて、本来は「放っておいてもあとには草が生い繁り、やがて林にまで生長していく」という意味だそうである。豊かな環境をもつ国にだけに許された表現である。日本は生物資源にも、それを育む環境にも恵まれた「生物資源大国」であり、その生物資源を先祖から引き継ぎかつ殖やしてきた「生物資産大国」でもあったのである。なんとか、この「生物資産」に頼る手立てはないものであろうか。

もっとも、この生物資源豊かな国土も今では乱開発にさらされている。他人のせいばかりでなく、最近までの農業技術の進歩も地方の遺伝資源の消滅に加担してきたことはたしかで、反省させられる。「清良記」の時代の豊かな生物資源が、今の南伊予地方に、はたしてどの程度保存されているかとなると、いささか心配にな

らないでもないが。

5. 「地方版地域農業研究—s」への期待

最初の清良の「作期を早めたら」という提案にもどるが、それが契機になって招かれたはずなのに、招かれた三人の農民はなにも答えていない。ずいぶん長々と農業談議に花を咲かせたにもかかわらずである。用水が整備されず、天水に大きく依存していた当時の農業では、作期を早めることは早ばつに直結し、病虫害の多発を招く怖れがきわめて多い。遠い先祖から代々語り継がれ、自らも経験してきた自然の脅威に比べれば、度重なる敵の襲撃といえどもごく短期的で軽微な被害にみえたということかも知れない。たとえ名君土居清良の仰せでも、こればかりはお聞きするわけには参らぬというわけであろうか。“土地に生きる”農民の知恵かも知れない。

考えてみれば、かつての日、地方にあって営まれていた農業は、“土地”の立地を熟知し、生物資源を徹底して活用することを基本として成立していたものである。“土地”が異なれば当然、農業も農業技術も異ってくる。昔の名君清良の命令でも、今日の中央の指導でも、それだけでは十分にカバーできない農業、農業技術が厳然として存在すると思う。日本語の名詞に複数表示がないことが、この場合には悔やまれる。一つ一つが個性をもってばらばらであるのが地方の農業であって、そういう意味では今日いう単数の「地域農業」ではなくて、複数の「地域農業—s」というべきものであった。今からの地域農業研究を考える時、「稲・麦、牛・豚」型、「コシヒカリ・ササニシキ」型の「全国版・没個性派」の地域農業研究（単数）とは別に、それぞれの地域の立地に適合し、地

域の生物資源を積極的に活用した「地方版・個性派」の地域農業研究（複数）が考えられないものであろうか。

たしかに問題は多い。収量が少ない。機械化に向かない、加工・流通に適さない。研究情報も少ないし、研究効率も悪い。もともと問題が多いから後回しにしてきたわけであるが、もうこのまま避けて通るわけにもいくまい。

「何を作ればよいのか」が問われる今日、それぞれの立地の上に豊かな生物資源を活かす新しいタイプの地域農業研究がもう一度考えられないものであろうか。最近「食」についての関心も高まり、良品質や健全性、多様化などに対する高度な要求が多くなってきている。花など非食用農作物に対しても、需要が伸びる一方で、多様化・差別化が強く求められてきている。こうした動きに同調するように、国の内外を網羅した商品の多品目少量流通システムが整備されてきている時代である。これからはそれぞれの地域の個性を活かし他では追従できないような、新しい需要を喚起し、新しい価値を生むような農畜産物の開発が、ぜひ必要になってくるように思う。

最近「むら起こし」に関連し、各地でキノコやシオデ、アケビなどの山野草、ヒエ、ソバなどの在来種を品種改良し、地方特産物に仕立てる自治体が増えてきている。この種のこまごまとした研究まで国公立機関の研究者が対応しなければならないのかという意見はあるが、そういつている間に地域農業が荒廃したのでは何にもならない。これからの地域農業研究にはこまごまとしたものの積み重ねしかないような気もする。バイオテクノロジーを駆使した各種作物の改良と増殖、成分育種による特定有効成分の増加、新しい価値を生む新商品の開発など、

長期間を要し、リスクの多い研究は国公立機関が分担した方がよい。

たとえ、一つ一つの技術の普及効果は小さくても、それがモデルになって周囲に大きく影響を与えていくことも十分考えられる。

「清良記」を引き合いに出したからといって、何も昔の作物・野菜だけを対象にする必要はない。海外の動・植物、品種を含めて、新しいタイプの地方農作物、地方農法の開発も大いに考えられる。今まで、地方のマイナーといわれる作物・家畜が切り捨てられてきた背景には、それらと流通システムとの結びつきの悪さがあった。こうした問題を解決し、また「新しい需要

を創出する」地域農業のためのポストハーベスト研究にも期待したい。いずれにしろ、地域農業の原風景、地方農作物や地方農法を最先端の科学技術の目でもう一度見直しかつ再生させる時期がきているような気がする。

もちろん、それだけで山積する地域農業問題のすべてが解決できるなどとは思わないが、それでも研究サイドとして、それぞれの地域の立地を利用し生物資源を活用する、各論型の「地域農業研究-s」に力をつくすことはぜひ必要に思える。とくに、都道府県農業試験場や地域農業試験場の研究者にがんばってほしい。

自然には、
自然から生まれたバイオ除草剤

りんごなし園の下草防除によるハダニ類の防除に適用拡大!

明治ハービエース水溶剤

果樹園、野菜畑、桑園、水田、非農耕地に!

- 確かな効きめです。
- 効きめが速く、長続きします。
- 土壌を汚染しません。
- 果樹等の根元まで除草できます。
- より高い安全性を追求しました。
- 新製剤——顆粒状水溶剤です。

明治製薬株式会社